仙台大学紀要
Vol. 44, No.2: 157-162, 2013

学会等報告

インド派遣武道団 報告

仲田　直樹

Naoki Nakata: India dispatch martial art team Report. Bulletin of Sendai University, 44 (2) : 157-162, March, 2013.

Key words: Judo, Martial art martial art performance meeting, Tradition
キーワード: 柔道，武道演武会，伝統

1．はじめに

この度，日印国交樹立60周年事業として，日本武道代表団がインド共和国デリー市に於いて，日本の伝統文化である，武道の真髄を披露することとなった．我が国は，古来よりインドの文化や思想に多大な影響を受け，今日の繁栄に至っている．日印両国は1952年の国交樹立以降年々，友好・親善関係の慶を深め，夫々の立場でアジア及び世界の安定と繁栄に貢献してきた．今日の両国の良好な関係は，政治･経済･民間交流に於いて不断の努力を60年間積み重ねてきた結果によるものである．昨年発生した東日本大震災の折には，インドの様々な支援が記憶に新しいところであり，改めて感謝の意を表したい．

2．派遣種目

1）現代武道（9道）　弓道・合気道・剣道・空手道・なぎなた・少林寺拳法・柔道・銃剣道・相撲
2）古武道（3流派）　金硬流唐手沖縄古武術･円心流居合据物斬剣法・澁川流柔術
3）島村宜伸団長をはじめとして・事務局・記録員等含めて総員73名

3．柔道代表団

1）責任者　菅波 盛雄　七段（順天堂大学）
2）副責任者　御嶽 知昭　八段（神奈川県警察）
3）団　員　鉄谷 竜三　六段（警視庁）
　　田中 康紀　六段（佐賀県警察）
　　河合 秀幸　五段（北海道警察）
　　仲田 直樹　五段（仙台大学）

4．日程

平成24年10月31日（水）～同年11月7日（水）

5．活動概略

10月31日（水）　結団式及び壮行会
（於：成田空港）

11月 1 日（木）　インド青年スポーツ省表敬訪問，FICCI（インド商工会議所連合会）にて記者会見

11月 2 日（金）　午前：ニューデリー日本人学校にてミニ演武会
午後：インデラ・ガンジ-

スタジアムにてリハーサル，その後現地の武道団体と交流稽古

11月 3日（土） 日本武道代表団・武道演武大会（於：インデラ・ガンジースタジアム）

11月 4日（日） 史跡等見学

11月 5日（月） ワークショップ（デリー警察婦人訓練所）・市内観光解団式

11月 6日（火） 終日自由行動・デリー出発（20：20）

11月 7日（水） 成田着後（7：20），解散

6．日本人学校訪問

11月2日午前

ニューデリー日本人学校に行く途中の交通大渋滞には閉口気味であり，とりわけ住宅街の違法駐車は筆舌に尽くしがたい．車の数が圧倒的に多く，加えて交通マナーとインフラの整備が全くされていない．

学校では，小学校1年生から中学校3年まで約500名が我々を出迎えてくれた．まず，小学6年生約25名による和太鼓や中学生約60名によるソーラン節を披露してくれたのだが，まさに威風堂々という言葉がふさわしい姿であり，あまりの感激に涙を流す団員までいたほどであった．我々柔道団も負けてられないと，約5分間という限られた時間ではあったが，前回受身・打込・投込・関節技・絞技・模範試合を迅速に行った．また，日本人学校の小学生と一緒に稽古する時間が別途設けられたのだが，予想以上に打込・投込の形ができているのには驚かされた．異国の地で日本人の小学生が正確な打込をする姿は，日本で小学生の柔道指導にも携わっている筆者にとっては大変微笑ましい光景であった．この小学生を指導しているのが，日本大使館二等理事官の須藤正裕氏（40歳，順天堂大学出身，講道館五段）であり，帰国直前まで大変お世話になった．

7．交流稽古

11月2日午後

武道演武大会の会場であるインデラ・ガンジースタジアムに移動し，現地の武道団体と交流稽古を行った．会場に畳が敷かれている部分は一試合場がやっととれるくらいの広さであるのに対し，会場には幼児から青年まで100名を超す柔道家が集まった．最初に菅波七段の指揮のもと，2班にわけて後受身・横受身を行った．その後，6名の団員全員が個々の得意技を披露し，6ヶ所で技の講習を行うという措置をとった．おもしろかったのは，何度繰り返し説明しても首を傾げられ自分自身に憤りを感じたが，あとで聞いた話では，インドでは「わかりました」・「OK」の時には首を縦に振るのではなく傾けるジェスチャーをするようだ．これは技の講習のみならず，写真撮影においても撮影者が撮影後に毎回首を傾げており最後までなじむことができなかったが，日本とインドの文化の違いを感じることができた．

8．武道演武大会

11月3日

この派遣の最大のイベントでもある武道演武会は，午前中から綿密なリハーサルを行い，16時から開催された．過去最大ともいわれる約6,300名の観衆の中，柔道は12団体中10番目に演武を行った．我々が披露した演武は以下の通りである．

(1) 立礼
(2) 前回受身・人飛び越し受身
　（地元の子供を土台に）
(3) 打込・10本×2セット
(4) 投込
　・一本背負投，一本背負投⇒上四方固
　・体落，体落⇒袈裟固

・払腰，大内刈⇒払腰
・巴投，出足払⇒腕挫十字固，片羽絞
・大外刈，大内刈⇒大外刈
(5) 模範試合
(6) 柔道体験

この武道演武会を成功させるために，何か月も前から準備をしていただいた何百人もの関係者の方々に我々ができる恩返しといえば，分刻みで予定された時間を厳守することと，精一杯の演武をすることであった．その点では，演武の順番が10番目であるにも関わらず，17時42分からの柔道演武予定時刻にほぼ時間通りに回ってきたことと，指定された8分間の演武も8分2秒で行うことができたことは，武道団全員の成功への強い意志と団結力が見受けられた．これは，世界の中でも時間に細かな日本人の律儀な性格を表しているのかもしれない．

演舞終了後には，地元の子供と団員による乱取が行われた．小さな子どもに団員が投げられて受身をとるごとにわき起こる大歓声と拍手に，インデラ・ガンジースタジアムは興奮の坩堝と化し，演武会の盛り上がりを実感することができた．これも関係者が地道に準備を重ねてきた結果であると感じた．我が国が長い年月を重ねて派遣事業を継続してきた成果が，このような形で一つの成果として結実したものと考える．

9．ワークショップ（於：デリー警察婦人訓練所）

11月5日

柔道衣を着て行う最後の行事としてデリー市内にある婦人警察訓練所を訪れた．ここでも日本人学校で行った演武同様，約5分間という短い時間であり，今回はコンクリートの上に薄手のマットが敷かれただけの簡易道場ではあったが，滞りなく演武することができた．演武終了後，婦人警官を相手に柔道指導を行う時間が設けられたが，菅波七段の指示にいち早く反応し，積極的に自分の技を披露する婦人警官の姿に感銘を受けた．

10．おわりに

12団体からなる武道団であったが，同じ武道を愛する者として，全団員がそれぞれの垣根を越え，友好，友情の輪を広げることができた有意義な派遣行事であった．同時に，日本の伝統を継承し，次世代に伝えていくことがいかに大切なことであるか，また，演武全体を通して激化が一層加速する国際社会にあって，日本古来のものを尊重することの重要性を再認識させられた．下村団長が武道セミナー閉講時の謝辞で語った，「国際交流とはお互いが自国の文化を誇りに思い，他国の文化を尊重し，敬意を払うことから始まる」の訓辞は日印の交流に限らず，民族，国境，宗教を問わず多くの人々に共感を得ることだろう．

その教訓を受け，教職に身を置く者として，武道を通して日本人としての矜持を持てる国際社会に有為なる人材育成を図らなければならないと，その意を強く胸に刻み込んだ次第である．

最後に，今回武道団員として貴重な経験をし，新たな視点から柔道を見る機会を戴きました．これらを今後の指導の糧にしたいと考えて居ります．

最後に，島村宣伸団長をはじめ日本武道館，在デリー日本大使館，全日本柔道連盟，講道館，インド柔道連盟の関係者の皆様に誌面を借りて心から厚く御礼を申し上げ報告とする．

（2012年11月30日受付
2013年 1 月22日受理）

日本人学校、交流稽古終了後

インデラガンジースタジアム、外観

武道演武会本番、開始式前の整列

現地の武道団体と交流稽古

武道演武会終了後、地元子供たちと

現地の武道団体と交流稽古・指導場面